

『ひとりっ子』

その心理と教育』

山下俊郎 著

同文書院

今度三回目の改訂版が出版されたこの書物を通読して、一冊の完結した本であることの印象を深くした。

序章で、ひとりっ子はどうして問題になるかという問いを提出し、前世紀の末にひとりっ子の研究を手がけたスタンレー・ホルルの「ひとりっ子であることは、すでにそれだけで一つの病気である」との言は、果してそうであるか、順を追って検討がなされる。先ずひとりっ子の心理学的研究の系譜が紹介され、ひとりっ子の全体的特異性が研究に従ってとり出され、いつも子どもに注がれる親の目——過教育と、きょ

うだいがいないことからくる社会生活の欠如が指摘される。そしてこのような条件にあるひとりっ子の特異性があるかどうか、実証的研究による吟味がなされ、身体的生活、知的生活、性格特質、社会的生活について、特異性を認める研究と否定する研究とが公正に、簡潔に検討される。そして更に、ひとりっ子は問題の子どもであるかどうかに関心をあてて論が進められ、周到な検討の結論として、「ひとりっ子であることは、それだけで一つの病気である」といったホルルの言葉は、現在の研究の結果では通用しない言葉になったと、著者の結論を出される。(P二一九)

その上で、ひとりっ子の教育を正しい軌道にのせる道が次に考究される。この章では、著者の長年にわたる保育研究の精髓が至るところに簡潔に示されている。たとえば、できるだけ少なく教育することという節を引用すると次のようである。「できるだけ少なく教育する、という表現はちょっとおかしい表現かもしれないが、その意味するところは、なるべく子どもを先に立てて自分後からついていくということである。……親の気持ちとしてはなんとかしてやりたい、手を出したい、なんとかいじりたい、という気持ちをおさえて、た

だ黙ってあとからついていくことである。くるんで包んでしまいたいところをジッとがまんして……」(P二二三) また、ひとりっ子の早熟になりやすい傾向をいましめ、早熟から解放する具体的方法の第一として、「子どもどうしの社会生活の中で生活するように……子どもの中へ解放してやる」ことを強調する。(P二四七) そしてひとりっ子の教育原理の要約として、一、「経験の尊重とその統制」、二、「子どもどうしの社会生活の尊重」を掲げ、これは同時に、教育全般にわたる原理であることを説く。序章から結論に至るまで、何度からせん状に問題が展開されて、この書物全体が美しい形態をなしている。長年の研究と経験によって成熟した著者でなければ作ることのできない書物である。

この書物とは、私自身がまだ大学生だったところからの長いつきあいがある。終戦直後、心理学科の学生にとって、実験心理学以外の心理学を勉強することは大変困難だった時代に、児童心理学の本も数えるほどしかなかった。そんなところに、山下俊郎著『教育的環境学』を読み、心理学の分野で

も、こんなに広い視野で子どものことを研究した本があるのかと感激した。この『教育的環境学』は昭和十二年の出版であるが、同年に『一人子の心理と教育』が出版されている。しばらく後に、この書物を手にしたのは、ある私の親しかった友人の書斎の中で、シュテルンの児童心理学のことなど語り合った時だったと思う。彼自身一人子であった。そのときは、まだ未知の分野が洋々と眼前にあった児童心理学のことを、抱負や希望と共に語っていたのであるが、今になって考えてみると、一人子としての彼自身の悩みが心の底にあったのではなかったかと私なりに考えるのである。この友人は「ひとりっ子」について淡々と語っているが、四十年間にわたって児童心理学の歴史の中を生きつづけた重みと、著者の保育に対する愛情と洞察を感じさせてくれる。

(津守 真)

